

学生は武蔵丘短期大学における教職課程教育から何を学んだか —アンケートによる学生評価の試み—

蔵原 三雪

On a survey of the students who have been studying the teachers training course in Musashigaoka College - the students' evaluation from the questionnaire -

Miyuki KURAHARA

Abstract

We reformed the curriculum of the teachers training course in our junior college in 1999. And the new curriculum has come into effect since April 2000. So I want to know our students had been developed, after studying the new curriculum for two years. The questionnaire was designed to measure the satisfaction of the students and to give them the opportunity on the new curriculum in January 2003.

The purpose of this paper is to clarify the students' thoughts on what they have studied the curriculum of the teachers training course.

Key words : junior college, the teachers training course, faculty development (FD)

キーワード：短期大学, 教職課程, FD (ファカルティ・ディベロップメント)

1 はじめに

1998年(平成10年)6月に「教職科目引き上げ等教育職員免許法」の改正が行われた(以下、新免許法とする)。これは今日の日本の教育現場の抱える問題状況を反映し、現場ですぐに働くことの出来る実践的な力量を持った教員、さまざまな問題を抱える生徒達と心を通わしながら生徒指導が出来る教員、広い視野にたって人類的な課題を考えることの出来る教員の養成を主眼としおこなわれた。「教職科目の引き上げ等」と示されたように、1種免許・2種免許を問わず教科の専門科目よりも、教職科目の充実が課せられたことに特徴がある。具体的には新設科目として総合演習を設けたり、中学校教員の免許取得のためには、教育実習を事前指導・事後指導

を含めて5単位とし、実習期間が120時間とされた。(注1)

これに伴い本学は教職課程カリキュラムを改正し、中学校教員養成課程(保健体育中学校2種免許)を設置する短期大学として文部科学省より1999年(平成11年)再課程認定を受けた。本学においては2000年度(平成12年度)新入生より新免許法に基づくカリキュラムが実施され、2年間にわたり教育実習生を送り出してきた。本学における教職課程の教育の進め方とその実際の内容・履修者の動向等についてはすでに「継続教育を見通した短大教職課程の教育」(注2)で報告した。そこで「継続教育を見通した」としたのは次のような趣旨であった。すなわち現代のようにめまぐるしく変化する社会において求められる教員の資質のすべてを2年間の短期大学在学中に養成するのは難しいが、短期大学の

教職課程を教員になるための学習の出発点すなわち「ファーストステージにおける学習」として位置づけると、将来的な発展の方向を短期大学の教職課程に見いだすことが出来ると考えた。(注3)

さて、今日大学教育改革が様々な角度から言われ、「地域社会と大学の連携」の課題、あるいは「大学の組織・運営のあり方」など大学の根幹に関わる課題が議論されている。(注4) FD (Faculty Development) も大学・短大に課せられた重要な課題の一つであるといえる。長い間大学における授業(講義・演習・実験・実技)は初等教育や中等教育機関における教育とは異なり、ある一定水準の学力と問題意識を持った学生を対象にして行うので、「わかりやすい授業」「双方向の授業」などの教授方法は高等教育機関の課題としては意識されてこなかった。学生が勉強しなかったり、課題が難しいといってもそれはどちらかと言えば学生自身の勉学に対する意識の希薄さの問題であると認識されてきた。

しかし進学率の上昇と18歳人口の減少によって日本の高等教育機関の「大衆化」が急速に進み、大学・短大も「全入時代」に入った。そのため大学・短大においてかつてのような学生に対する教育の仕方では入学した学生との間で大きな溝が生じる状態になっている。両者の思いが互いにすれ違い、十分な実りを結ぶことができない結果をもたらすことがはっきりしてきた。また高等教育の普及を早くに果したアメリカの大学の経験も紹介され、大学・短大における教員の教授能力を高めるFDが広く取り上げられるようになったのである。大学・短大を取り巻く社会の変化が自身のあり方の改革を求めているのである。(注5)

日本の大学・短大におけるFDはまだ経験も浅く、何をどのようにすすめていくか、どこまでしなければならぬか、どのような順序ですすめていくと本来のFDが推進されるのか等々についてのコンセンサスは形成されているといえる状況にはない。そもそも従来の授業の何が学生達に合わなくなってきているのかという現状認識や学生達が満足するような授業形態はどのようなものか、はたまた新しい教養教育は何を課題とすべきかな

どについての議論が求められている。以上のような課題についての議論を進め、改革を進めていくためには大学・短大の学習主体である学生に対する理解を深めることが必要である。なかでも学生達が大学・短大の在学中にどのように成長・変化をしてきたか、そのことに対する学生自身の認識はいかなるものかなどをよく知ることは授業評価としては欠くことのできない課題の一つである。(注6)

本稿はこうした課題意識のもとに、大学・短大のFDをすすめていくための準備作業として、新しい教職カリキュラムのもとで履修をしてきた学生に対するアンケート調査に基づき、履修者の教職に対する動機・満足度・感想等を整理分析し、中間報告としたい。(注7)

2 学生は何をどのように学んでいるか

—本学教職課程カリキュラム—

本学で取得出来る教員免許は中学校教諭二種免許状(保健体育)である。この教員免許を取得するために本学では以下の科目を履修することとしている。

・基礎教育科目

日本国憲法(市民生活と憲法)・外国語コミュニケーション(英語コミュニケーション)・情報機器の操作Ⅰ・Ⅱ

(6単位)

・教科に関する科目

体育実技(陸上競技1・体操・器械運動1・水泳1・球技1・表現運動1から3科目以上取得)

「体育原理・スポーツ心理学・スポーツ経営学・スポーツ社会学」及び「運動スポーツ基礎理論・運動処方論1、運動処方論2」

生理学(解剖生理学・運動生理学・栄養生理学・運動生理学実習) 衛生学及び公衆衛生学 学校保健(学校保健1、学校保健2、保健教育論、健康管理論、スポーツ医学)

(26単位以上)

・教科又は教職に関する科目

スポーツ栄養学

(2単位)

・教職専門科目

教師への道・教育原理・発達と学習の心理学・学習指導法・道徳教育指導法・特別活動指導法・保健体育科教育法・教育相談・生徒指導・総合演習(健康生活科学演習)・教育実習(事前・事後指導を含む)

(23単位)

旧免許法のもとのカリキュラムと比べると基礎教育科目の情報機器の操作Ⅱ、教職専門科目としては教師への道、生徒指導、総合演習と教育実習が3単位から5単位へ増えたことが大きな変化といえる。本学において再課程認定を受ける際に中学校の保健体育教員としてはたとえば「体育実技では陸上競技・体操・器械運動・水泳・球技・表現運動の中から3種目は少なくとも学んでほしい」「健康生活科に所属する学生として保健の領域についても教えることが出来る力をつける」のような議論が交わされカリキュラムを改定した。新免許法では2種免許の最低履修単位は教科の専門科目が10単位、教職専門科目21単位とされている。これと比べると本学の教職課程はとりわけ教科の専門科目が充実しているといえる。

これらの外に義務教育教員免許取得者に対して介護等体験(養護学校2日間・社会福祉施設5日間)が義務づけられた。(注8) また本学では通常の授業に加えて教育実習の事前指導、教員採用試験のための講話、教職に就いている卒業生の講演会など土曜日に特別授業を行っている。(注9) 教職専門科目23単位は卒業要件単位72単位には含まれない。以上の教職科目の単位の増加と介護等体験などのために履修学生が免許取得のために割く時間は少ないとはいえない状況といえる。(注10)

3 「2年間教職課程を学んで」のアンケートから

2000年度後期、通常の授業の最終日2003年1月27日(月)「生徒指導」の授業の終わりに、次の

ようなアンケート(記名)をとった。これは教育実習に限定した感想ではなく、教職課程の学習全体に対する感想を知ることを目的とした。回答者の中には次年度の教育実習に行くことを決めている学生(科目等履修生として)も含まれている。

アンケート回収38人:

回答者のプロフィール

・教員免許取得予定者	25人
・次年度教育実習予定者及び進学予定者	13人
・男子学生	13人
・女子学生	25人(注11)

アンケート用紙

* 2年間の教職課程を学んで

1) 教職課程を履修した理由

① 資格がほしい

a 自分で考えた

b 親に勧められた

c 友達がやるというので

d その他()

② 資格と言うよりも部活や体育の授業などに興味があった

2) 学んでみて

① 満足した

② やや満足した

③ やや満足しない

④ 満足しない

その理由()

3) これから学んだことをどのように発展させたいと思っていますか。

4) 2年間教職を履修して

<私が学んだもの>

以下、アンケートの回答を整理してみたい。

1) 教職課程を履修した理由

「自分で考えて履修した」が大半である。

履修の理由はまず第1に「自分で考えた」が32

人で82%を占める。「親に勧められた」「友達がやるというので」はそれぞれ1人ずつであった。その他は「顧問に勧められた」「あこがれ」「なんとなく」であった。また「資格と言うよりも部活や体育の授業などに興味があった」は20人で半数近い。①,②は複数回答したものも多く見られた。

中学校や高校時代の部活の経験などからその授業や部活の指導に対して興味を持ちながら、「自分で教職を取りたい」と考える学生が共通する履修者像として浮かび上がってくる。

2) 学んでみて「満足した」か

学んでみた満足度は「やや満足」が19人でもっとも多く、つぎが「満足した」の10人である。続いて「やや満足しない」が6人、「満足しない」3人であった。

「満足した」理由

- *教育実習に行けた！！
- *教育実習を行うための勉強が出来たから
いろいろな生徒の気持ちがわかった
- *生徒の現状を知れ、客観的に物事が見れるようになった
- *知らないことをたくさん学ぶことができた
- *2種の免許を取得するために、多くの科目があり、どの科目も奥深いものだった
- *学校生活が充実した
- *教職の授業は難しかったけど、勉強していく中で教師の仕事に興味をもった

「やや満足」の理由

- *まだまだ自分のなかで足りないことが多かった
- *教えることを学んだ
- *知識として蓄えられたと思う
- *2年次になり、改めてやる気になって授業を受けているとき、自分も教壇に立つのだなという気持ちになり、あとは自分次第だと思った
- *今まで学んできたことは今後も役立つと思う
- *授業をちゃんと聞いていたと思う

「やや満足しない」理由

- *勉強時間が少ないと思った。もっと勉強したいと思った。もっと休みなどに勉強したかった
- *短い時間で多くの内容を学べたが具体的な事についての習熟度が低いような感じがする
- *学んでいる人たちの考えがまだ甘く、考えが抽象的
- *自分の考えとほぼ同じだった
- *もっと時間割を早くしてほしいと思った

「満足しない」理由

- * (在学中に) 免許がとれなかった (卒業後科目等履修生として免許を取得する予定)

「やや満足しない」と回答した学生は「もっと勉強したい」「習熟度が低い」「学んでいる人たちの考えがまだ甘い」等々どちらかという教職に対する目的意識が強いがゆえに他の人に対しても自分自身に対しても厳しい評価になっている傾向が見られた。

3) 「これから学んだことをどのように発展させたいと思っているか」

この問いに対しては「満足している」人も「やや満足しない」と答える人も積極的な回答を寄せている。

回答をいくつか類型化すると①「(臨時採用などで) 教員になりたい」グループ、②「教員にはなりたいが、4年制大学へ編入し1種免許をとってから教員になる」ことを希望するグループ、③「スポーツインストラクターとして教えることに生かす・子どもの理解に生かす・社会で生かす」と考えるグループ、④「次の教育実習に生かす」という科目等履修生として残りの単位を履修予定のグループにおよそ分けることができる。

① 教員になりたい

- *臨時採用を受けようと思う その中で今までやってきたことを生かしながら生徒とふれあい、教員を目指そうと思う
- *出来れば教職の現場で自分を高めていきたいと思っています
- *臨時採用

- * 今後の教師生活に生かしていきたいと思いません
 - * 臨採または正規採用されたとき、生徒指導の仕方を一番生かそうと思う。特に生徒指導は答えも終わりもないので、ここで習ったことをきっかけにしていきたい
 - * 教員として生徒達と接するために生かしていきたいと思う。また子どもに対する考え方が以前と変わったので様々な子どもと身近に接することができるようにしたいと思う
 - * 実際に現場にでてもっと専門的な知識を高めたいと思っています。俺の持っている免許はまだ2種なので、1種に書き換えられるようにもっと勉強していきたいです
 - * 教員になれるよう頑張ります
- ② 4年制大学に編入し1種免許を取る
- * 自分は先生になったときに、伝える力などをさらに発展させたいと思った
 - * (4年制) 大学に編入し、教員免許1種の免許を取得したいと思っているので、短大で学んだ生徒指導・教育学・保体教などを活用していきたいと思っています
 - * 私は教員の免許1種をとりたいと思っているので、編入しても短大で学んだことを忘れずに教師になるために頑張りたいと思った
 - * 大学に編入して1種免許を取りたいと思います。短大では自主的に学んでいこうという意欲がなかったが、視野を広げて勉強していきたいです
 - * 採用試験のとき保体教で勉強したことが役立つと思う。日々勉強だと思う
 - * (4年制大学で) 教員免許を取るのに役立ちます
 - * 短大では主に中学生への教育指導等を学んだので、今後は小学校教育に生かしていきたいと思う。体育という科目の指導から小学校の科目指導に生かしていければと思っている
- ③ 教える事に生かす・子どもの理解・社会で生かす
- * 教員になるかはわからないけれど、教えると
- いうことはこれからスポーツクラブなどに就職したらあると思うので、生徒理解などの役に立っていきたい
- * 誰かに指導する立場になったとき、わかりやすいように伝えられるように発展させたい
 - * 学んだことはずっと生かしていきたい。教員になってもなれなくても、就職してもスポーツクラブで小さい子どもにふれあう時間が多いため
 - * 知識的に残しておきたい
 - * 2年間の講義では不十分であると思うのでまた自分で勉強したい。社会に出て人と接し働いていく上で生かせると思う
 - * 今後、指導者という立場になったときに、是非この学んだことを生かしたい
 - * 常に逆の立場に立ったものの見方・考え方をしたい
 - * 就職や社会生活の中で生かしていきたい
 - * 私はあがり症で人前で指導したり、自分の思っていることをうまくしゃべれず、これらを克服するために教職に挑戦しました。教育実習では乗り越えなければいけない壁がたくさんあったが、強い気持ちをもってがんばれた。社会に出たときはこれらの経験を生かしていきたいと思う
 - * 今まで学んできたことを今後社会に出ていくときやそれ以降も生かしていきたいと思えます
 - * いろいろな方面で役立てることができると思う
 - * 必要と機会に応じて、使っていきたい
 - * 教員にはならないかもしれないけど、勉強してきたものは損にならないと思うから、何かの役にたてたいと思う
- ④ 教育実習で生かす (科目等履修生として)
- * 教育実習に生かしていきたい
 - * 現実を受け止めて、時代錯誤をおこさない
 - * これから教育実習に行くので、この2年間で学んだことを生かして、中学校に行けたら良いと思います
 - * 自分が教育実習に行ったときに役立てたい

4) 2年間教職を履修して<私が学んだもの>

最後に総括的な感想をたずねた。フリーアンサーであるがそれだけ、教職課程あるいは教員免許を取得することに対する履修者の率直な考えが出されていると思われる。とりわけ1年生の入学当初と後期における変化・成長と教育実習を前後しての大きな変化、さらには介護等体験も含めて実習・体験といった実体験から学ぶことの大きさによる成長が共通して指摘されていることに注目したい。

*私は2年間教職を履修してとても自分自身成長した。私はこの学校に来て、教職を取ることが目的でやってきました。教職を学ぶというのはいわゆる“教師になるために修業である”と思って今までやってきた。そしてそれなりに努力をしたと思う。しかしまだ足りない部分はたくさんある。

授業の面では教職科目に特に力を注いだ。自分の中では保体教と特活と道徳が苦しめられた。みんなに「暗記するだけでいいんだよ」と言われたが、私はそんな事だけじゃ頭に入らないし、勉強していてもしるみに欠けると思い、暗記から理解する勉強法にしてから、一気に教職の勉強が楽しくなりました。

私は(中略)教職を学んでいくうちに人との接し方などで自分自身が成長できたと思います。最後に総合演習では多くのことを経験でき、学べた。結構グループがまとまらず、一人で突っ走ってしまった部分がある。みんなと価値観も違うの??というのもあったので無事におわり良かったです。総合演習は2年間の集大成なので、一生懸命取り組み、良かったです。

*教職を履修して気づいたことは自分のこれまでの経験を振り返ることがいかに大切かと言うことです。あらゆる問題点を解決するためには、現状を把握し、今と昔を比較して、解決策を考えていくことはとても重要なことだと思いました。様々な経験をしていくことで、感受性を豊かにしたり、視野を広げることが出来るし、柔軟な対応ができると思います。

教師になるためには多少の学力が必要になってくるが、大切なことは生徒との信頼関係だと思います。教育実習や介護等体験を通して、その場、そのときの自分の気持ちはとても大切なんだなあと思いました。

*数多くのことを学ぶことが出来ました。保健体育科教育法や総合演習などいろんな事を経験することが出来ました。その中でも教育実習が自分の中では一番大きな経験でした。授業で覚えることもすごく大切なことばかりでとても為になりましたが、それよりも教育実習や介護体験など実際に現場で体験して覚えたことはとても大きな糧になったと思います。実際に生徒とふれあうことがすごく大切だと実習の時に感じました。2年間勉強し、学んだことはこれからどんな生き方をしても絶対に役に立つのでもっと生かしていきたいと思っています。

*2年間教職を履修してみて今まで気楽に考えていたこと、適当にやってきたことについてもっと深く追求すべきものがあつたと思直すことが出来ました。教育実習の模擬授業の連続で大きな声を出すこと、人前に立つことに自信がつかしました。そして1年の後期の保健体育科教育法のテストでは本当に必死で勉強して受かることが出来、やれば出来るというのを身をもって感じる事が出来ました。この学校に来た一つの目標、教職課程を修了させることを頑張りたいです。

*教員免許状は簡単に取得できると思っていたけど、とても難しくて大変ということを学んでいく中で知れた。そのお陰で教員になるための意義と生徒との関わり合いも学べた。とても人生において良い勉強をした。今までいろいろな経験してきたけど、教職課程をとって今まで以上に思い出深い経験をさせてもらった。教育実習は充実した3週間だった。この2年間で自分が今までよりも変わったと思える。

*教育実習に行つて、教師の立場として生徒と接することの難しさを実感しました。生徒から見た教師に対する気持ちがわかるため、生

徒との接し方には十分配慮しました。3週間の実習の中で、生徒との接し方の考え方が変わって行きました。生徒に「自」を出して接することができるようになっていきました。生徒（人）との接し方を学びました。

*保健体育という科目の指導から、生徒に対する学校生活面での指導などを主に学んだが、私が一番学んだことは生徒とどう向き合っていくかという教師としての心構えであると思う。一年次では教師への道、教育原理などによって教師とはどうあるべきかなど総合的な知識について学ぶことが出来た。保健体育科教育法、道徳教育指導法では科目についての具体的な指導法について習得した。

2年次では生徒に対する心のケアについて知る機会がもてた。このようなことは理解はしていても、実際の現場ではうまく対応できるか不安なので、今後経験によっても学んでいきたいと思う。短大で学んだ知識を生かして教育実習に行くことが出来、私にとって教育実習は一生の宝になった。3週間という長いようで短く、生徒から学ばせてもらったことのほうが多かった。生徒の励ましがあつたからこそ、3週間過ごして行くことが出来たのだと思う。これからも経験を重ね、様々なことを学んでいき、教師になるため日々精進していきたいと思う。

*1年生の時は教職に対して、余り興味を示さなかった。けれども1年後期の保体教の試験で、教職に対する意欲がわいてきた。絶対試験に合格して母校である〇〇中学校に教育実習に行こう、そして教師になりたいと強く思った。

教育実習に行き、初めて体験することばかりで、不安と緊張の毎日だった。自分が教師の立場となって生徒に指導することは一見簡単そうだと思ったが、現実には難しかった。そこで私が学んだものは授業というものはただ指導するだけではなく、全員が心から本当に楽しい、またこの授業をやってほしいということがわかった。また熱心な指導をすればするほど、生徒は期待に応えてくれることを学

んだ。教育実習を通して私は少し成長したと思う。

これから4年制大学に行き、1種免許を取得するために、いろいろな困難があるが、短大で勉強したことや教育実習を思い出し、頑張っていきたいです。

*まさか自分が教壇に立てるとは思わなかった。そして3週間の教育実習は私にとって貴重な経験となりました。自分の母校である中学校に実習に行けて、誇りに思いました。私は教育実習に行くことに対してかなりの不安・緊張そして自分は教師という立場でやっていけるのかどうか本当に悩みました。けれども私は生徒に励まされ、教師という仕事に少し自信ができました。生で見る教師の仕事の多さには本当に驚きました。学校にもたくさんの問題があり、特に服装について厳しく指導していた先生の姿を見るととても大変だなと感じました。

私はバレーボールを指導しましたが、バレーボールの経験がある私でも実際指導するというのはとても難しいと感じました。私はどうしたらバレーボールの楽しみをわかってもらえるか、教材研究に力を入れました。その結果、バレーボールが余り好きでなかった生徒が私の授業を受けて、楽しいと言ってくれました。私はとてもうれしく教師っていいなと思いました。教育実習を通して、教師になりたいという思いが強くなりました。短大で学んだことは忘れずこれからも頑張りたいと思いました。

*教育実習が始まるまでは教職の勉強をしていることをとても後悔していた。それまでは自分は教えてもらうばかりで、教えることについて考えたことがなかったし、興味がなかったので3週間自分が授業する自信がなかった。教育実習に行って、実習先の先生方がとても良い方だったり、生徒も協力的だったので楽しかった。中学生は悪い悪いといわれていたのですが、想像以上に素直でよい子ばかりで安心しました。また心配だった授業も授業数が少なかったのと、体育祭で生徒達が盛り上

がっていたのでやりやすく、何となく出来たのかもしれない。しかし通常の先生方の授業を見て、自分でもきちんとした授業展開が出来るようになりたいと思いました。

教育実習を終えて、自分に自信がついたことが大きかったです。また介護体験でも今までに接したことがない身障者の方々と過ごすことが出来て良かったと思いました。

*私はまじめにこつこつやることが出来ない人間だとつくづく思います。・・・この短大に来て「情けない情けない」といつも思ってきました。教育実習に行って、授業は失敗するし、日誌は書かないし、たくさんの「やってしまった・・・」を繰り返し、きっと先生方にはダメな子と思われ、武蔵丘をマイナスにさせてしまったと思います。

それでも充実していました。私は頑張ったといえるほどやることはやったと思います。だから教育実習は情けないとは思いません。・・・教職はとりあえず一つも落とさずにやってきたので、四大に行っても役立つと思います。先生になりたい夢は中学校からの夢なので、あきらめずに頑張りたいと思います。約1年半後1回目の試験を受けていい結果がでるようにしたいです。生徒指導の授業で「こういう子どもに対してどう対応するか」などたくさんのことを自分なりに考えたのは実際そうなったときのためにいいと思いました。ほかにも特活の大事さもわかったし、実技でも、授業の展開も練習できたし、すごく良かったです。

これからは〇〇大学で好きな自分に近づいて夢を叶えられるように頑張りたいと思います。

*特に教育実習を経験して教職への見方、考え方が変わりました。教職の免許を取得し、教師になりたい夢は高校時代から抱くようになり、その希望と夢はふくらんでいきました。実際にこの短大で1年間教職をとり、母校へ実習へいき、自分の勉強が足りなかったと感じました。体育を指導する上で必要なのは生徒と接することであり、実習中も多くのとまどいもありました。しかしこの経験を通じて

改めて、教師の魅力を感じ、難しさを強く感じました。私は小さい頃からスポーツが好きで、子どもも大好きでした。そんな私にとって人に指導することは自分の喜びでもありました。

2年間の教職を通して勉強は正直好きではありませんでしたが、自分自身学んでよかったですと思っています。その理由に、教育実習が最大の理由です。実習で得たことは本当に大きく、生徒という最高の宝物に出会えたと言うことが何よりも大切です。今でも学校で林間学校に行けばおみやげを買ってきてくれたり、メールなどで学校(クラス)の状況などを教えてくれます。これから私は教師ではなく、インストラクターになります。人を指導することにはわかりありませんが、私にとってあの生徒達が最初で最後かもしれないと考えると、この学校で教職を勉強できて良かったです。これからもニュースや新聞で今の生徒の状況、どんな悩みをもっているのか、生徒指導のあり方、どんな指導が大切かなど考えていきたいです。私は(中略)ギリギリながらここまでこられて、自分なりに頑張ってきて良かったと思います。

*教育実習に行くまでは教職を深く考えていなかったけど、実習に行って生徒と直接、接して教えることの難しさとか生徒理解の大切さなど、学ぶこと考えることがたくさんありました。施設での実習(介護等体験)も自分の考えを変えることができたし、知的障害者についてや障害者の理解の大変さ、必要なことを身をもって感じました。

教職は単位を取るのは大変だし、教師になることは簡単なことではないけど、2年間の中で自分のあり方や他人理解の難しさ、大切さなど様々なことを学ぶことが出来ました。課題について自ら考え、調べ、またグループでの研究など高校では学ぶことの出来なかったものをいろいろと体験することが出来ました。教職をとったことで、人前で話すことへの抵抗や自分で決めて行動しなければいけない事への責任など、人としてたくさん良いことを

学べました。とても良い経験になりました。

- * 1年生になって教職の授業をとって前期・後期とも本当に大変でした。何度もこの授業をやめようかと思いました。テストも覚えることがいっぱい、辛くて辛くていい加減になったときもありました。(親にも期待されて)わざと単位を落とそうとしました。それでも私の心のどこかに頑張ろうとする気持ちもあり、保体教も追試で受かり、2年になり教育実習に行かれるようになりました。教育実習に行く間、とても不安で何していいかわからず、手に付きませんでした。が、教育実習が終わって、行って良かったと思えるようになりました。これは私にとってはすごいことです。シンポです。生徒とどう接して、どう教えていったらよいか、最近はどんな事がはやっているかなどわかったし、辛かったけど、すばらしい思い出になりました。気持ちが1年の時より2年になってからはるかに変わったことが授業を通して1番学んだことです。すがすがしい気持ちです。
- * 私は2年間教職を勉強してきて、いろいろと学ぶことができたと思います。私は高校生までは、人に頼って甘えながら生きてきたので、自分から積極的に何かをするというのもすごく苦手でした。でも短大で、教職を勉強していくうちに、今までの自分のままではダメだと感じるようになりました。教育実習に行ったときも、人に指導する立場になって初めて教師の大変さ、生徒指導の大切さがわかりました。2年間で私は大きく成長できたと思います。また教職を勉強してきて思ったのは子どもたちが年々変わってきているということです。私が中学生のときと比べると、全く違うので驚きました。そのような時代の変化にそって勉強できたのも良かったけど、まだまだ生徒指導のあり方について学んで行かなくてはいけないと思いました。
- * 教職系に関しては今現在の教育問題や子どもの心理を知り、その対応などを学べた。教育実習に関しては短期間ではあったけれど実際の現場での仕事を通してたくさんの考え方を

知ることができた。そのほかにもたくさん学んだことがある。ただ特に思ったことは子どもに対しての対応がこのままでいいのだろうかということでした。

- * この学校に入るときからずっと教師になりたいと思っていて、いざ教職科目を履修してみると、本当に辛いことばかりだった。はじめはどの子達もここで教員免許を取ろうと思って頑張っていたけど、学期が終わるごとに次々と人数が減ってきてあきらめていく人たちを見てきて、私もあきらめようかと悩んだけれど結局、教職科目を取ってきた。まず、1年後期の科目である保健体育科教育法で落ちたが、再試でギリギリで受かり、特別活動指導法もとりあえずのギリギリ合格だった。正直教職科目はすべてギリギリで通ってきていてはつきり私は教師に向いていないのではないかと最近をよく思う。でもここまで落ちこぼれてしまえば後ははい上がるだけだとも思う。この今まで学んだことは私にとってプラス志向にしてくれる勉強だったのかも知れない。また出来ないことということを知っているから出来ない人の事もわかるのではないかと思う。だからこの学んだことをバネにこれからもさらに学んでいきたいと思う。
- * 実習に行く前の授業では、何かを学んでいるという実感はなく、ただ実習に行きたいという思いだけで、この段階では学んでいるとは思わなかった。しかし実習に行ってみると今までに学んだことが生かすことができてよかったと思えました。生徒の現状や言葉遣い、行動などから自分がその生徒に行く最善の接し方などを導くことが出来たので、行く前は学んでいるという実感はなかったが、これまでの授業はとても自分の為になりました。実習後は安心感などから気を抜くことが多いけどまだ全日程が終了したわけではないので最後にもう一度気を引き締めようと思います。
- * 自分が生徒だった頃と現在との生徒の実態の違いなどを学ぶことが出来た。問題を起して

しまう生徒や不登校の生徒に対する関わり方など知ることが出来た。体育の授業について指導内容や指導方法を学ぶことが出来た。実技を指導するときのポイントや保健の内容など大切なことが多かった。授業を行う際に個々の生徒だけにとらわれず、全体を見ることが大切である。しかし全体に目を向けながらも各生徒のことを深く考えて、少しでも良い部分をのばすような声かけが重要である。さらに言葉での指導だけではなく、見本を見せることも生徒へのわかりやすい指導として必要である。

- * 体育の専門知識や実技、今の生徒の実態など今まで自分が知らなかった幅広い知識を学ぶことが出来た。また今までは部活の事だけを一生懸命やっていればいいと思っていたが、そうではなく、生徒一人一人の現状を把握することが大切だということがわかった。学校での生活の仕方がそのまま普段の生活態度につながると言ってもいいくらいに大切になってきている。学校での生活というのは教師の指導の仕方次第で良くも悪くもなるというのが授業をしていて改めて感じた。教育実習では実際の現場において今の生徒のことでたくさんのことを学ぶことが出来た。これから臨時採用ではあるが、教員になることができたなら、生徒が学校に来たくてしょうがなくなるくらいの学校づくりをしてみたいと思っている。
- * 正直言って、面倒になったときもあったけど、教育実習はとても楽しかった。教員免許のために2年間頑張ったというよりも、教育実習のために頑張った気がする。でも、教育実習が終わったあとは気がゆるんでだらけた部分があった。毎日学校があつて大変だったけど、その分ちゃんと学べた事があつたと思うので、良かった。そして何より先生は大変だと思った。それでも返ってくるものが大きくて、やりがいがあるだろうと思う。その部分は人間と人間のつながりのあるところで、ほかの仕事にはない魅力ある部分だと思う。今は欲しい資格がほかにあるから、教職に就

くのは無理だけど、資格が取れたら教職に就こうと今思った。臨採でも何でもいいから教職に就いて資格を使おうと思う。そのときは運動部所属が第1条件！！

- * 自分がイメージしていた教員というのはすごく楽しく、休みもしっかり取れて、給料もこの不景気のなかでも多くもらえるというイメージであったが、実際はそうではなく、休みをなかなかとれなくて家での仕事もあつたり、それプラス生徒の相談にもものつたりと大変だと思った。また生徒が10人いれば10人も違った性格をしていて、それぞれにあつた指導法があるのだと思いました。
- * 私は編入して1種免許を必ず取りたいと思います。自分はこの2年間サッカーのほかにはたくさん事を学ぶことが出来ました。教育実習は母校に行けてとてもうれしかったです。社会体育実習は「人間とはなんだろう？」と思いとて充実した10日間を送ることが出来ました。教員になるためにも、まだまだ勉強が必要だと思ったので、編入を希望しました。2年間を無駄にしないように〇〇女子大に行ってもサッカーに勉強に頑張りたいと思います。教職を取って人前で自分の意見をしっかり自信を持っていえるようになりました。
- * 教育実習に行けるように授業を頑張っていたのですが、テストに合格しなくて行けなかったのです。でも学校教育に関する記事やニュースに目を通すようになりました。特に新学習指導要領が実施され、週5日制になったことで、生徒達の学力がどうなっていくのかということが今後どうなのかを注目していきたいと思います。教員になるためには日々勉強で、生徒一人一人に合わせた指導をしなくてはいけないので、いろいろなケースを考えていなくてはいけないのだということもわかりました。中学生期の犯罪・非行に教師として指導しなくてはいけないので正しい判断で指導できたらと思いました。知らなかったこともたくさんあつたので、とても勉強になったと思います。

4 まとめにかえて

学生が教職課程の履修を志望した動機は様々であり、またそこから彼ら自身の満足度も当然のことながら異なっている。アンケートに表現された学生の感想・考え方が意味するものについて考察しておきたい。

まず第1に「これから学んだことをどのように発展させたいと思っているか」という問いに対して「教員になりたい」「4年制大学に編入して1種免許状を取得したい」が合わせて4割近くを占めていることに注目したい。「教員になりたい」と強い意志を示す履修生も必ずしも最初から「信念」を持っていたのではない。2年間履修してようやく確信するようになる学生もいる。

「そこで私が学んだものは授業というものはただ指導するだけではなく、全員が心から本当に楽しい、またこの授業をやってほしいということがわかった。また熱心な指導をすればするほど、生徒は期待に答えてくれることを学んだ」「何より先生は大変だと思った。それでも返ってくるものが大きくて、やりがいがあるだろうと思う。その部分は人間と人間のつながりのあるところで、ほかの仕事にはない魅力のある部分だと思う」と学生たちは実際の学校現場での実習によって、それまでの考え方が試されたことを実感している。そして先生や生徒達との交流の中で、教師の仕事の責任とやりがい・魅力を感じずなかで強い意志を自己の中に育ててきたのである。(注12)

第2に教員免許の取得と4年制大学編入の関連についてふれておきたい。学生達の中には「中学校の体育教師になりたい」と希望している人もいるが、「出来れば高校の体育教師になって、部活も一生懸命指導してみたい」と希望する学生もいる。高校の教員免許は別に取得しなければ出来ないで、条件が許せば編入をして、中学校1種と高校の教員免許の取得を目指すようになる。すでに本学教職課程履修の卒業生には4年制大学に編入し中学校1種免許・高等学校教員免許を取得し、高校教員や公立中学校教員になったり、学童保育やスイミングスクールのインストラクターの

経験(社会体育実習やアルバイト)から小学校教員を志望するようになり、小学校教員免許を取得し、小学校教員になるなど豊かな経験が蓄積されつつある。こうしたことは在学生達に「自分はどうのような進路を選択するか」を考える材料を提供している。学生にとって教職課程を履修することはもっとも自分にふさわしい進路は何かを考える機会すなわち「進路選択を広げる機会の提供」としての意味を持っているといえる。(注13)

第3に教職以外の仕事につく場合でも「子どもにスポーツを教えるときに役立てたい」と答える学生が少なからずいることに注目したい。スポーツクラブや幼児体育あるいは社会体育施設などのインストラクターにつく学生達にとっても教職課程の教育は彼らの自己実現に対して意味を持っているということができよう。(注14)

このグループには入学当初「何となく資格の一つとしてとれるものなら取りたい」と履修してきた学生も含まれる。しかしそのような学生も教職の学習を続ける中で、「高校生までは、人に頼って甘えながら生きてきたので、自分から積極的に何かをするというのもすごく苦手でした。でも短大で教職を勉強していくうちに、今までの自分ではダメだと感じるようになりました」「教職を取ったことで、人前で話す事への抵抗や自分で決めて行動しなければいけない事への責任など、人としてたくさん良いことを学べました」など彼ら自身によってその変容が認識されている。そればかりではない。「実習に行ってみると今までに学んだことが生かすことができよかったです」といのように、実際に生徒達に教えるという経験によって、自己の持っていた知識や実技の力を客観的にとらえるようになる。

第4に「やや満足しない」学生に対する評価である。すでにふれたがその理由は「もっと勉強したい」「具体的な内容について習熟度が低いような感じ」「学んでいる人たちの考えがまだ甘く、考えが抽象的」などである。このような意見を持つ学生は「教職を学ぶというのはいわゆる”教師になるための修業である”と思って今までやってきた」などの意見に示されるように自己に対して、他に対しても厳しくみる傾向がある。しかし

総合評価では「やや満足しない」としているが、<私が学んだもの>では同じ学生が「体育の専門知識や実技、今の生徒の実態など今まで自分が知らなかった幅広い知識を学ぶことが出来た。・・・教員になることが出来たら、生徒が来たくてしょうなくなるくらいの学校づくりをしてみたい」「自分自身が成長できたと思います」と自身の成長については自覚している。こうした熱心な学生達が「満足」するにはどのようにすべきかについては今後さまざまな角度から深めていきたい。

以上4点について、教職課程教育に対する学生のアンケートに現れた学生自身の評価・感想を検討してきた。これらは教職課程教育が将来へ向け教員を養成するという当初の目的に対する評価である。ところで学生にとって教職課程の学習は「将来の為」でありながら「現在の生活」とも密接に結びついているということ、すなわちある意味では「教職教育の波及効果」ともいえる事柄について最後にふれておきたい。

あるとき、学生がふと「教職をとっていると人のことや周りのことがよく見えるんだけど・・・」と語った。彼のなかで「教職を取っていると」と「人や周りのことがよく見える」ということがどのように関連づけられ理解されているか、またそれが何を意味するかについてはさらに詳しい検討が必要であろう。しかし彼は少なくとも教職の学習を通じて多様な人間の理解を深め、周囲と自己との関係を客観的に認識できるようになったことを自覚している。この発言は学生自身が自ら学習して得たさまざまな知識を「現在」の学生生活の中でその意味をとらえ返していることを物語っている。

学生達は自分の将来の生活設計をしながら、今を生き、学習している。このような文脈でみると教職課程の学習は「将来の為」でありながら、実は今現在大学・短大で学んでいる学生に対してその学生生活を左右するほどの「何か」をも提供しているのである。教えている側はもっとその「何か」について探求する努力をしなければならないのではなからうか。この点については今後の課題としたい。

注

- (1) 平成11年6月10日法九八・この免許法改正に伴う教育職員免許法施行規則の改正が行われた。そこでは中学校教諭の普通免許状のうち二種免許状の授与を受けるために「教科に関する科目」は10単位以上とした。「教職の意義等に関する科目」や「総合演習」（「総合演習は、人類に共通する課題又は我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」教育職員免許法施行規則第六条・別表備考七）などの科目が新設されるとともに中学校教員免許取得のための教育実習の単位数は3単位から5単位に増えた。このように教職科目の単位数が引き上げられた一方で教科の専門科目は20単位から10単位と2分の1に削減された。
 - (2) 加納弘二と共著・武蔵丘短期大学紀要第6巻、33-46頁、1998年
 - (3) 短大で免許取得後の進路を教員に限定すると少子化のために学校の統合や学級数の減少によって、正規の採用は依然として厳しい状況にあること、さらに教員の高学歴化が進み、大学院で専修免許取得した者が歓迎される傾向にあることなどから、厳しい状況にある。しかし以下に見る日本短期大学協会の表明する考え方からすると、教職課程履修の意味は卒業後直ちに教職に就いたか否かという視点からの評価だけでは狭いという見方になる。むしろ短大における教職課程履修をその後の学習の入り口・出発点と考えることが重要である。
- 日本私立短期大学協会は中央教育審議会初等中等教育分科会「教員養成部会」における「今後の教員免許制度の在り方」のヒアリングに向けて次のような意見を提出していた。「多様な人材を養成するという観点から、常に門戸が開放され、教員の供給源の層を厚くすることが必要であり、間違っても教員養成

大学や大学学部のみ委ねてしまうような閉鎖的なものであってはならない」(教員養成の「開放制」)、「教員の資質向上は、養成期間の長短、履修科目の多寡によって論じられるべきではなく、むしろ現職教員の研修制度及び免許状上進制度の充実にこそ求められるべきと考え」る、「短期大学・大学を問わず、多発といわれるほど教職課程を履修する学生が多いということは、教育的、教職的な素養を求める機運が高いという意味であり、国家社会における人間教育の立場から考えても、あるいは最近の教育の混迷から考えてもむしろ評価されてしかるべきもの」(開放的な教員養成の波及効果について)、「戦後、我が国の教員養成において短期大学が果たした役割と、これまで積み上げてきた実績」の4つの点から「現在、短期大学に与えられている中学校、小学校そして幼稚園教員の養成について、いささかも縮小されることなく堅持していただきたいと強く要望する」とした。(平成13年7月19日)

また短大における教員養成の意義については拙稿「短期大学における教員養成—50年をふりかえって—」(日本教師教育学会年報第9号・27—33頁)参照

- (4) たとえば大学審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」(2000年11月22日)参照
- (5) 大学におけるFDの方法についてはさまざまな議論がある。たとえば『全入時代の大学とは新しい大学教育を創る』(梶田叡一・有斐閣選書・2000年4月)、『授業をどうする!カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』(香取草之助 監訳・東海大学出版会・1995年12月)などがある。なお財団法人大学コンソーシアム京都主催の第3回97'FDフォーラムにおける館 昭氏の「授業創造とファカルティ・ディベロップメント—大学単位制から見た授業のあり方—」(「97'第3回FDフォーラム報告集」1—6頁、1998.5)は大学・短大において学校として組織的にFDをすすめる方策を考えていく上で、示唆

的である。

- (6) FDと一言でいってもその課題は多様である。個々の大学・短大でどのような学生を受け入れているのか、目指す目標はどこにあるか、また学校の条件によっても当然異なる。従って全体の動向を認識しつつ、個々の学校の課題を設定する事が重要であろう。
- (7) なお新免許法に基づくカリキュラムを履修した平成13年度教職課程履修者に「教職課程の履修をおえて」というアンケート調査を行った。平成14年度のアンケートと項目の設定が異なるので、この調査も含めた考察は改めて行いたい。なお、本稿で記した新免許法に基づくカリキュラムは平成13年度入学生が履修したものに限定している。
- (8) 「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教職員免許法の特例に関する法律」(平成9年6月)介護等体験において規定の日程を終了すると、証明書が発行される。
- (9) 特別授業等については前掲「継続教育を見通した短大教職課程の教育」(蔵原三雪・加納弘二)に詳しい。
- (10) 単位数の増加がどのように影響しているかという点では「履修科目が多くて、授業が大変」などの感想は見られるが、新カリキュラムは一斉に実施しているので当人達にとっては旧カリキュラムとの比較の上での感想はない。介護等体験や社会体育実習(平成14年度からはインターンシップ)などの影響も大きいと思われるが、その点についての検討は今後の課題としたい。また「卒業要件単位72単位」は本稿で取り上げた2001年4月入学生に適用された学則に規定された卒業単位数である。なおその後改定され現在の卒業要件単位は62単位である。
- (11) 回答者の内「次年度教育実習予定者及び進学予定者」は次年度本学で科目等履修生として「教育実習(事前指導・事後指導を含む)」等の科目の履修希望者と4年制大学編入し、教員免許取得を希望している学生(卒業時に2種免許未取得者)を意味する。
- (12) 教職課程の履修によって学生達の成長がめ

ざましいことは誰もが指摘するところであるが、中でも重要なことは<「教えられる人」から「教える人」へ>立場を変えることによって視野が広がることであると別のところで指摘した。拙稿「第3章 教師以外の教育者の道」(『教師をめざす』第Ⅲ部) 227-236頁、学文社、2002,10

(13) 平成13年度と平成14年度の教育実習に行った学生の進路は次の通りである。

平成13年度 30人

臨時採用教員 4人

(公立中学校1人・公立小学校非常勤講師1人・公立小学校補助教員2人)

知的障害者社会福祉施設1人

進学 16人

(うち体育学部以外2人・初等教育課程1人)

平成14年度 28人

臨時採用希望者 5人

進学 10人

(うち社会学部1人・初等教育課程1人)

社会福祉施設 3人

スポーツクラブ 4人

平成14年度の卒業生についてはまだ不確定の部分がある。また13年度科目等履修生として教育実習に行ったのは4人、14年度4人である。このように見ると平成13年度卒業生の教員免許取得者は34人となる。本学の教員免許取得希望者にとって科目等履修生制度の意味は大きい。平成13年、14年では臨時採用の教員をしながら4年制大学編入を決めた卒業生が1人づついる。

なお第1期から第6期までの卒業生で公立中学校教員や臨時教員になったり、4年制大学へ編入した人たちについては「卒業生インタビュー収録集」(水上和夫・蔵原三雪・太田あや子・平成10年度私立学校等経常経費補助金特別補助「特色ある教育研究の推進—地域交流に基づく健康生活の構築—」報告書平成11年3月)を参照のこと

(14) 前掲拙稿「教師以外の教育者の道」(『教師をめざす』227-236頁)

謝 辞

アンケートに快く答えてくださった平成14年度「生徒指導」の履修学生に心から感謝いたします。